

「現代文」における読みの技術と権力構造

高坂浩一

1. はじめに

大学入試を受験する高校生あるいは、浪人生、あるいは再受験をしようとする大学生（以下受験生と呼ぶ）にとって、「読みの技術」は最も要求されるものである。それは、現代文だけにとどまらず、およそ言葉によって書かれたものが問題として出題される、あるいは試験範囲の内部にある以上は避けては通れないものである。

では、「読みの技術」とは何か。それを考える前に、「読むこと」とは何かについて定義しておきたい。田中実によれば、「読むこと」は「眼前の客体の対象の文章の羅列、その客体の文章そのものに還元できるのではなく、読み手のコンテクストに還元され」という。そして、「読書行為が始まった瞬間、客体の対象の文章はオリジナルセンテンス・《原文》と読み手に現れたその〈影〉、パーソナルセンテンス・〈本文〉とに分離し、後者を読む行為」こそが「読むこと」であるという。ロラン・バルトがかつて論じたように、読書行為によっては、客体の対象の文字の羅列に辿り着くことができないのである。

それを踏まえて、現代文の問題を解く受験生について考えてみよう。例えば、センター試験。センター試験において受験生はいくつかの選択肢の中から最も適切な答えを選べと要求される。先の田中の論によれば、「読むこと」は読み手のコンテクストに還元されるのであるから、受験生の読みは受験生のコンテクストに還元されなければならない。しかし、センター試験で要求されるのは、定まった一つの絶対的ともみえる解であり、ここに受験生の読みは反映されないように思われる。必要になるのは、テキストを読んだ出題者の読みを読むことであると考えられる。

しかし、出題者の読みを読むとはどういうことか。ここに受験生にとって多くの誤解が生じる。つまり、パーソナルセンテンスを読むということが読むということであるにもかかわらず、個のコンテクストを無視した読みの規定を強要されるという誤解である。いやこれは、誤解とまでは言えないかもしれない。実際そのような面はある。しかしながら、いくら、読み手のコンテクストに還元された文章を読むことになろうとも、完全にその権力—権力とあえていうが—に従うだけにとどまらないのは自明の摂理である。というのも文章には必ず文の規則が存在し、また、自然界の規則あるいは、その文章内部に明記された、あるいは暗示された規則が存するためである。

例えば、地球は太陽の周りを廻るというのは、現代の我々がもつ普遍的な真理である。当然テキストにおいても、自明なこととして扱われる。ただし、このテキストの舞台が8世紀であると明示されていたら、暗に地球が太陽の周りを廻ると考えるべきだとテキストに要求されていることになる。このような明示あるいは暗示を規則として受験生は読み取る必要がある。そして、必ず答えに辿り着ける問題を作成するため

には、このような選択肢を出題者は作成しなければならない。つまり、正確に言えば、出題者のパーソナルセンテンスに従った読みを読むのではなく、あくまでも共通のコードに従って読むということが受験生には求められているのである。そこにパーソナルセンテンスの読みという個の体験は必要ない。少なくとも、それが読みの全てではない。

したがって、受験生に「読みの技術」として伝えるべきことは規則を読み取るということにつきよう。稿者は長年に渡って「読みの技術」を教育しようと試みてきたが、以上のある種自明な命題が受験生にとって容易にわかるものではないように思われる。

稿者の経験をより普遍的な形で共有するためには、実際の受験生の誤りを掲出する必要があるが、受験生の誤りは星の数ほどあり、単にそれを論うだけではかなりまとまりのない結論しか導出できまい。そこで本稿では、受験生の犯しうる幾つかの誤りを、過去問題の解説者が犯した誤りを事例として理論を交えつつ考察していきたい。

2. パーソナルセンテンスの拡大解釈

早稲田大学商学部 2009 年度の現代文の問題は、花田清輝『復興期の精神』からの出題であった。以下必要な部分のみ問題本文を引用する。

ルネッサンスは、私に、海鞘の一種であるクラヴェリナという小さな生物を連想させる。この動物を水盤のなかにいれ、数日の間、水をかえないで、そのままほおっておくと、不思議なことに、それは次第にちぢかみはじめる。そうして、やがてそれのもつすべての複雑な器官は段々簡単なものになり、ついに完全な胚子的状態に達してしまう。残っているのは、小さな、白い、不透明な球状のものだけであり、そのなかでは、あらゆる生の徴候が消え去り、心臓の鼓動すらとまっている。クラヴェリナは死んだのだ。

A

。ところが、ところが、ここで水をかえると、奇妙なことに、この白い球状をした残骸が、徐々に展開しはじめ、漸次透明になり、構造が複雑化し、最後には、ふたたび以前の健康なクラヴェリナの状態に戻ってしまう。再生は、死とともに始まり、結末から発端にむかって帰ることによっておわる。注目すべき点は、死が一小さな、白い、不透明な球状をした死が、自らのうちに、生を展開するに足る組織的な力を、黙々とひそめていたということだ。

空欄Aに当てはまる文として最も適当なものを選ぶという問題である。以下設問を掲出する。イ・すくなくとも死んでしまったように見える。ロ・一度死んだことは疑いない。ハ・もはや生き返ることなどありえない。ニ・生物学の死の定義に基づけばそういわなければならない。

さて、この問題、赤本に解説がある。解説はあるが、解説に誤りがある。後述するように、受験生とは異なるプロセスを経て生じた誤りであると考えられるが、誤りの

原因は同根であろうから、解説を引用する。

直前で、クラヴェリナの心臓の鼓動が止まったことをもって「死んだのだ」と断定しておきながら、直後で、「水をかえると」生き返ったと翻している。断定が不確かな断定となり、さらに否定されるという流れになる。よってイが入る。ロは、「一度」が蘇生を前提とした表現であるため、「ところが」に続かない。ハは、「もはや～ありえない」という強調表現のため、不適。同段落末尾の「(死が)生を展開するに足る組織的な力を、黙々とひそめていた」につながらない。ニは、「生物学の死の定義」とは普通、生命活動の不可逆的な停止をいうから、入りにくい。文脈からイと決定するのは難しく、消去法に拠らざるをえないだろう。

上記に引用した解説によれば、正答はイということになる。そして、これは正しい。ここで稿者が問題としたいのは、解説の曖昧さである。問題であるのは、「ニは、「生物学の死の定義」とは普通、生命活動の不可逆的な停止をいうから、入りにくい」という一文である。「入りにくい」という言葉は、つまり、蓋然性の高低の問題に帰するということか。となれば、それは、出題者の読みに左右されてしまうのではないか。ここは、「入りにくい」ではなく、「入らない」と断言しなくてはなるまい。もちろん、この解説では断言できない。

邪推するに、解説者は、本文を確認したのであろう。その上で解いたからこそこのような非断定的で極めて曖昧さを残した解説で良しとしたのである。そもそも、「生物学の死の定義」とは普通、生命活動の不可逆的な停止をいう」というこの一文は妥当であろうか。ここで、「生物学の死の定義」について扱うだけの能力は持ち合わせていないが、この定義が、「現代社会においては、地球は太陽の周りを廻るものである」という定義と同様の確からしさを持っているのかという点には大いに疑問が残る。当然、クラヴェリナは死んでいないわけであり、「生物学の死の定義」という解説者のコンテクストに存するものをあてはめうるのかという問題は極めて大きいといえる。

このような定義が解答に必要であるならば、当然、テキスト内部において定義されるべきであろう。ここには、解説者がパーソナルセンテンスのみを読みこみ、オリジナルセンテンスに目を向けなかった点に誤りがあると言える。

同様の誤りについてもう一点確認しておこう。同じく早稲田大学は商学部 2009 年度の現代文の問題で、花田清輝『復興期の精神』の文章の続きである。続けて引用する。なお、一部の解答を補ってあることを断っておく。

それは、ルネッサンスの中世から古代への復帰の過程において、死の観念の演じたであろう重要な役割を思わせる。当時における人間は、誰も彼も、多かれ少なかれ、かれらがどん詰まりの状態に達してしまっていたことを知っていたのではないのか。果てまできたのだ。すべてが地ひびきをたてて崩壊する。明るい未来

というものは考えられない。ただ自滅あるのみだ。にもかかわらず、かれらはなお存在し続けているのである。ここにおいて、かれらはクラヴェリナのように再生する。再生せざるを得ない。人間的であると同時に非人間的な、あの歴大なかれらの仕事の堆積は、すでに生きることをやめた人間の、やむにやまれぬ死からの反撃ではなかったか。おそらくルネッサンスにたいするこういう見方は、あまりにもペシミスティックであるであろう。おそらく人々は、そこに、私の死にたいする理由のない愛を見いだすでもあろう。しかし、ペーターの描きだしたようなルネッサンスは—そうして、その後、一般に流布するに至った、人間的な、あまりに人間的なルネッサンスの影像是、とうてい私には信じがたい。それは、Bのような感じがする。ところでほんとうのルネッサンスは、火をつけると、めらめらと青い焰をたてて燃えあがる、強烈な酒のようなものであったのだ。転形期のもつ性格は無慈悲であり、必死の抵抗以外に再生の道はないのだ。ペーターのみたのは、再生してしまった健康なクラヴェリナの姿であった。しかるに、ルネッサンスにおいて私の問題にしたいのは、結果ではなく、過程である。クラヴェリナの正体のうかがわれるのは、その生から死へのすさまじい逆光の過程においてであった。

先例と同様に、空欄Bに当てはまる文として最も適当なものを選ぶという問題である。以下設問を掲出する。イ・まろやかな葡萄酒、ロ・清涼なミネラルウォーター、ハ・生ぬるい牛乳、ニ・口当たりのよい栄養飲料。

まず、解説を確認してみよう。解説を引用する。

空欄にはペーターの描くルネッサンス像に対する筆者の比喩的な評言が入る。前文に「とうてい私には信じがたい」とあるように、筆者はそれに対して否定的である。空欄直後の文で、筆者は「ほんとうのルネッサンスは、……強烈な酒のようなものであった」と述べ、さらに続く文で「ペーターのみたのは、再生してしまった健康なクラヴェリナの姿であった」と述べていることから、ペーターに対する評言は、「強烈な酒」とは対照的なものであり、かつ「健康」なものである。正解はハの「生ぬるい牛乳」で、「強烈」との対比という点でも、また「健康」的である点でも適切。ニの「口当たりのよい栄養飲料」もこの二点をクリアしているが、「白い、不透明な球状もの（原文ママ）」という点でもクラヴェリナのイメージに合わない。イは、「まろやかな」は合致するが、「健康」に結びつかない。ロは、「清涼な」は「健康」に合致するが、「強烈」との対比に欠ける。

正答はハ「生ぬるい牛乳」である。解説をまとめれば「健康」であり、「強烈」との対比もあり、かつ「白い、不透明」という見た目から判断できるのだという。しかし本当にそうか。まず、「残っているのは、小さな、白い、不透明な球状のものだけ

であり、そのなかでは、あらゆる生の徴候が消え去り、心臓の鼓動すらとまっている」と文章にあるが、この「白い、不透明」というのは、死んだクラヴェリナである。「健康」と矛盾していることは明白であろう。したがって、この解説は根本的に間違っていると看做ざるをえない。しかも「白い、不透明」という見た目が意味をなさないとしたうえで、この解説に従うとするならば、当然「口当たりのよい栄養飲料」という選択肢も正答足り得るということになる。

解説者の誤読、誤読とあえて言うが、に従えば、正答は決定不可能となる。一つ目の解説は、パーソナルセンテンスを背景として読みこんでしまったが故の間違いであったが、今回の間違いは、単なる誤読である。ただし、それでも正答に辿りついてしまったのは、解説者が本を参照したからであろう。

さて、この解説が誤りであることは立証できたと思うが、実際にはどのように解説すべきであったかについて触れておく。選択肢は、イ・まろやかな葡萄酒、ロ・清涼なミネラルウォーター、ハ・生ぬるい牛乳、ニ・口当たりのよい栄養飲料の四つであった。この選択肢をまず場合分けする。そうすると、イ、ロ、ニはすべて形容詞が良い意味でのみ使用されるものであるのに対し、ハは「生ぬるい」と決して良い意味で使用されるものではないことが分かるかと思う。解説者はこれに言及すべきであった。

問題文に「その後、一般に流布するに至った、人間的な、あまりに人間的なルネッサンスの影像是、とうてい私には信じがたい。それは、Bのような感じがする。ところでほんとうのルネッサンスは…」とあるように、筆者は、空欄Bを「信じがたい」ものの比喩として出し「ほんとうのルネッサンス」は「強烈な酒のようなものであったのだ」としているわけで、筆者がペーターの描きだしたルネッサンスに対する批判をしている中での比喩であるということをお察すれば、当然、ここは否定的な言説、少なくとも肯定的な言説でないものが入ることになるだろう。となれば、答えとしてハ「生ぬるい牛乳」を充てるのが適切ということになる。

これで、適語補充の問題におけるパーソナルセンテンスを共通のコードであると認識する誤り、そして誤読による誤りの二例を掲出した。ここで問題としたいのは、誤読による誤りというトートロジー的な誤りではなく、パーソナルセンテンスを共通のコードであると認識してしまったが故の誤りの方である。

3. 共通のコード

では、ここでパーソナルセンテンスを誤解したところの共通のコードというものが何かについて考えておきたい。どこまでを共通のコードとするかという問いである。共通のコードは共通認識された記号である。そもそも言語とは、外延指示の機能を持つ。客観的に対象を指し示すのである。客観的な対象は、我々の共通認識の源であるといえる。評論文においては、それは明白であろう。一方で、現代文、主に小説問題において問題となるのは、感情的な要素をどこまで客観的对象として認識するかということにある。

差し当たり、「喜怒哀楽」という世間一般に了承されているかに思われる感情概念

について考えておきたい。日常生活において、他者の「喜怒哀楽」は現象からのみ推察可能である。当然、ここにはホックシールドによる表層演技や深層演技がなされている可能性もあるが¹、テキスト上においては、そこまで記述されているものとして扱うため、表現を追うだけでよいと考えられる。

ここでも解説の誤りを指摘することで、どのように感情について読み取るべきかを提示していきたい。センター試験 2012 年の国語本試験からの引用である。本文は井伏鱒二の小説『たま虫を見る』である。なお、本来は全文であるが、恣意的に必要と思われる一段落のみを引用している。

それから十幾年もたって、私は再びこの昆虫を見つけたのである。

すでに私は大学生にもなっていて、恋人さえ持っていた。恋人は美しく且つ可憐で、彼女は私と一緒に散歩することを最も好んだ。

郊外の畑地は全く耕されていなかったのだから、彼女が田舎へ出発してしまう前の日にも、私たちはその畑地を野原とみなした。積み重ねた煉瓦と材木とは、私達の密会をどの家の二階からも電車の窓からも見えなくした。

「きっと、お手紙下されば、私はほんとに幸福ですわ……空があんなに青く晴れているんですもの。」

彼女は日常は極めて快活であったが、恋愛を語ろうとするときだけは、少なからず通俗的でまた感傷的であった。そして物事をすべて厳密に約束する癖があった。

「明日は午後二時三十分にあそこで待っていますわ。」

「僕等は三時まで学校があります。」

「では三時三十分頃、そしてきっとお待ちしていますわ。」

私は決心して彼女の肩の上に手を置いた。そのとき、急にはその名前を思い出せないほどの美しい一匹の昆虫が、私のレインコートの胸にとまっていたのである。彼女はすばやく指先でその昆虫をはじき落してしまったので、私は周章で叫んだ。

「たま虫ですよ！」

しかし最早たま虫はその羽根を撃ちくだかれて、腹を見せながら死んでいた。私はそれを拾いとりたが、彼女はそれよりも早く草履でふみにじった。

「このレインコートの色ね。」

そして彼女は私の胸に視線をうつしたのであるが、私は彼女の肩に再び手を置く機会を失ってしまった。私たちはお互いに暫く黙っていた後で、私は言った。

「あなたは、このレインコートのいろは嫌いだったのですね！」

「あら、ちっともそんなことはありませんわ。たま虫って美しい虫ですもの。」

「でも、あなたはそれをふみつぶしちゃいました。」

¹ ホックシールドは、外的な振る舞いを作り上げることが表層演技であり、内部から感情を揺り動かし、内面から他者になりきることを深層演技であるとする。

「だってあなたの胸のところに虫がついていたんですもの。」
私達はお互いに深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあったりしたのである。

下線部に至るまでのやりとりの説明として最も適するものを答えよという設問である。正答の選択肢と解説において言及される選択肢に限って引用する。

③私は、肩に置いた手をたま虫を口実にして恋人に振り払われたと考え、ショックを受けているが、恋人は、その私をなだめようとしたのに私がよそよそしい態度をとり続けているので意外に思い、互いに相手の態度にとまどい、責めるような気持ちになっている。⑤私は、突然現れた美しいたま虫を無慈悲に扱われたことに驚き、恋人を責めるような発言をしているが、恋人は、大切な二人の時間を邪魔したたま虫をはじき落としたのに相手が理解してくれないと思い、互いに落胆し、非難するような気持ちになっている。

少し長くなるが、以下に解説を引用する。

二人の心情の推移を問う設問。「私」が恋人と密会している時、彼女が「私」のレインコートにとまったたま虫を指先ではじき落とし、おまけに草履でふみにじってしまう。たま虫の美しさを愛好する「私」が彼女の行動を非難しても、彼女は「私」のためにしたと思い、少しも悪びれるところがない。そのためお互いが気まづくなり、「深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあったりした」というもの。ここから、たま虫を巡って二人の思いがすれ違い、お互いを非難するに至るといふ経緯が読み取れる。

選択肢三行と長いので、やはりまず文末を検討する。傍線部の「相手をとがめる」に着眼して、③「責めるような気持ちになっている」と⑤「非難するような気持ちになっている」に絞って、両者の適否を判断すれば良い。正解は⑤で、「無慈悲」とは恋人がたま虫をはじき落としてふみにじったことをいう。「大切な二人の時間を邪魔した」とあるのは、「私」が彼女の肩に手を置いて近寄ろうとした、まさにその時にたま虫が現れたことをいう。「落胆」はもちろん「深い吐息」をいう。

以上が解説の引用であるが、経験上、受験生が最も多く問題視するのは、解説にある「大切な二人の時間を邪魔した」とあるのは、「私」が彼女の肩に手を置いて近寄ろうとした、まさにその時にたま虫が現れたことをいう」という一節である。つまり、どこを持って大切であるのかと問うのである。人生経験の問題にするのは容易いが、教育上の問題としては非常に困難な問題を内包しているように思われる。

恋人との時間が大切だというのは極めて主観的な判断であろうから、この点に納得

のいかない受験生が多いのである。つまり、ここに私的と公的という問題が顕現してくる。先ほどの言葉で繰り返せば、どこまでを共通のコードとすべきなのかという問題でもある。そして、はじめに共通のコード足り得る問題をこそ出題者は出すべきだと述べた。解説者は少なくとも、この共通のコードを指摘できていない。その点において、この解説は解説たりえていないのである。⑤という読みを絶対化する必要はないが、この設問においては、最も適切である。それは、単に、恋人との時間が大切だという主観的な理由によるのではない。

我々は、「彼女が田舎へ出発してしまう前の日」という場面設定を見逃すべきではない。ここからは、出会える時間が少ないということが見いだせよう。大切な時間という傍証であると考えられる。しかし、それでも、受験生の中には、このようにいうものもいるだろう。出会える時間が少ないにしても、そして恋人との時間だとしても大切だとは思えない。あるいは、明日旅立つとしても、すぐに戻ってくるのではないだろうか。後者に関しては、簡単である。それは書いていないからである。パーソナルセンテンスの拡大解釈であると言えば良いであろう。では、前者はどうか。これもまた主観的感覚の問題となる。

この設問に関しては、次のように読むべきであろう。つまり、この小説は私小説である。したがって、全ての現象は〈私〉の目を通して語られる。ということは、彼女がどのように感じているかも〈私〉の目に映る表象から考える必要があるだろう。そして「彼女は日常は極めて快活であったが、恋愛を語ろうとするときだけは、少なからず通俗的でまた感傷的であった」とあるように〈私〉の評価する彼女は日常と異なり、恋愛時には、通俗的で感傷的である。そして、「きっと、お手紙下されば、私はほんとに幸福ですわ……空があんなに青く晴れているんですもの。」という台詞から分かるように、感傷的な雰囲気になっている彼女は恋愛状態にあると言って良い。そして、「お手紙下されば、私はほんとに幸福ですわ」というのは彼女の気持ちを表していると考えべきであろう。当然、否定する材料はない。手紙をもらえるだけで、幸せな彼女にとって、現在の状況を幸せでない、大切でないとする根拠は見いだせないように思われる。

このように主観的な感情という共通コードであっても文章内から読み取る必要がある。恋人と一緒に時間が大切であるというのは、主観的であり、必ずしも全員に当てはまるとは言えない。受験生にとって要求されるべきことは、共通のコード足り得るものを本文中から見つけることなのである。したがって、教育する側には共通のコードを読み解くように受験生に教授する必要がある。

4. まとめ

ここまで、大学入試の過去問とその解説の誤りを示し、そして正しながら、「読みの技術」というものについて考えてきた。

読み手は、受験の現代文と呼ばれる問題の中では、オリジナルセンテンスを受容した際に生じるパーソナルセンテンスの読みを持ち込んではならない。また、主観的な

感情の読み取りに関しても、必ずどこかにある根拠を探さなくてはならない。文学研究における「読みの技術」と受験勉強における「読みの技術」は異なる。しかしながら、文学研究にしても、基盤としての「読みの技術」というのは、共通のコードを読み取ることの重要さは揺るがない。確かに悪問とされる入試問題は多々あるが、むしろ問題としてあるのは、解説の不備である。特に受験生にとって解説を頼ることは必要不可欠であることを考えれば、曖昧なままにされた解説が問題であることは明白であろう。

最後に、ここまで論じた個の経験談を客観的な理論として構築しておきたい。はじめに援用した田中の論にもう一度立ち返る。

田中によれば、読書は、受容者の個別のコンテクストに還元されるものであった。とすれば、選択肢から最も適切である文を選ぶという現代文特有のシステムは、出題者の個別のコンテクストに受容者のコンテクストを擦り合わせるよう強要するシステムである。そこには、権力者である出題者から非権力者である受験生に対する社会制度が顕現する。かつてガタリがその著『分子革命』で述べたように「意味作用の把握は権力のありかとおつねに分かちがたく結びついている」のである。このガタリの主張は、ある命題を述べたときそれがどのように判断されるかはその場にある権力を持つものによって判断され得るというものであるが、それは、現代文の設問選択による命題の表明とも同義とみなせるのではないだろうか。

意味作用の把握が権力によってなされるということは、しかし、ある種の教育でもある。人間が共同体な場で生活する以上は、ある種の権力の流れから逸脱することは困難である。実は問題となるのは、先ほどのような認識をされることである。出題者の個別のコンテクストに受容者のコンテクストを擦り合わせるよう強要するシステムであると考えることが問題なのである。

実際には、そうではない。出題者の個別のコンテクストに受容者のコンテクストを擦り合わせるよう強要するのではなく、まず出題者は共通のコードとして社会一般に認識されている定義を文の中に見出し、それをを用いて設問を作成する。ただし、これは自覚的に行わなければならない。無意識にパーソナルセンテンスの読みが紛れ込んでしまうからである。紛れ込んでしまえば、それは、個の読みの強要となりうる。これは、出題者だけでなく教育者も同様である。無意識にパーソナルセンテンスの読みを用いて解決してはならない。この場合、先ほど例示したように、「入りにくい」などという客観性に欠ける判断が出てくることになる。そして、これもまた権力による強要となりうる。

以上を踏まえて、必要なことは、場面設定などの客観性の高い、あくまでも高いとしか言えないが、条件を用いて読解することである。これが現代文を入学試験の問題として読むということであり、それ以外の多様な読みはその上に立つてのみ存在すべきものなのである。

普遍的に用いることの可能な「読みの技術」は示せず、また、教育において権力が常に内包されているという常識的な観点しか本稿では示せなかった。しかしながら、

自明ではありつつも、時に忘れさられてしまう「読みの技術」という個の読みの押し付けの危険性について十分に喚起できたと考える。

今後は、これらの論を踏まえた上で、個別具体的な「読みの技術」から普遍的な「読みの技術」へと論を繋いでいきたいと思う。

参考文献

- A. R. ホックシールド. (2000) 『管理される心—感情が商品になるとき—』 世界思想社. (訳: 石川准・室伏亜希)
- 田中実. (2018) 「〈近代小説〉の神髄は不条理、概念としての〈第三項〉がこれを拓く—鷗外初期三部作を例にして—」 『日本文学』 2018年8月号.
- 花田清輝. (2008) 『復興期の精神』 講談社文芸文庫.
- フェリックス・ガタリ. (1988) 『分子革命—欲望社会のミクロ分析』 法政大学出版. (訳: 杉村昌昭)
- フェリックス・ガタリ. (1994) 「制度のなかにおけるシニフィアンの位置」 『政治と精神分析』 法政大学出版. (訳: 杉村昌昭)
- ロラン・バルト. (1997) 「作品からテキストへ」 『物語の構造分析』 みすず書房. (訳: 花輪光)
- 教学社. (2015) 『2016年版 センター試験 過去問研究 国語』 教学社.
- 教学社編. (2014) 『2015年版 大学入試シリーズ No. 416 早稲田大学 (商学部)』 教学社.